

第十二回 美しい日本語で詩を聴く会

朗読詩集 2025.7.5

お題「母へ」



①手相

上村多恵子

⑬花の殻

司 由衣

②カーネーションの愛

下田喜久美

③べねちあ

北原 千代

④笑顔

もみにゃーじ

⑤地母神

波野 仁

⑥母へ

清水崇彦

⑦母

加納由将

⑧一番好きな花

スノードロップ

⑨仔象のパンジャブと

春名江吏子

⑩さ・が・ら

すみくらまりこ

⑪母

吉村侑久代

⑫海からきた女

有馬 敲

①

手相 上村多恵子

この子は

生命線が途中で切れているさかい

病気か

事故で

はよう死ぬかもしれんして

いうて

いつもいつも

手相みてくれはった

昨日もみたやないの

そやけど

少しは伸びてるかもわからへんし

伸びてへんでも

せめて

生命線なごうなるようにと

エンピツで濃う濃う

なぞって

手首まで描いてくれはった

感情線は支線が多うて

疳の虫が強いし

結婚線は何本もあつて

いやらしい子や

きつと身持ちが悪いわ

こんな線 淫らやな

母の生命線は

やはり短かったのだろうか

結婚線は

多情多恨に描かれていたのだろうか

幸福線は薄かったのだろうか

②

カーネーションの愛

下田喜久美

おりかさなったびろうどの

いくえもの 豊かさに

花びらのふくよかな温かさにくるまって居たい

母さんの懐のあたたかさに

その呼ぶ声

ほのかなにおい

微笑み

唄っていた静かな声

心が帰ってゆくところ

注意して見つめてくれるその視線

気づかわしげな思いのある表情は

私の全体を見つめ 変ったことはないかと探して
いる

小さな変化も見逃さずに

また知人に会ったとき「私の娘です」と紹介する晴
れ晴れとした声に

私は何ほどの答えを持っているのかと恥じ入った

満ち足りたあなたの 優しさや慈愛に何のとどめ

も持たずに来たのに

その花びらの重なりの深さ偉大さ

はるけき尊き思いを たたえていたのかを

いつも愛の泉となつて私を抱きしめる

あなたは花

いまはとおい 白い雲の花弁よ

③

べねちあ

北原 千代

朱塗（しゅぬ）りの小匣（こばこ）は

母の数少ない婚礼道具のひとつ

うす暗い寢室の桐たんすに置かれ　ひかりに包ま
れていた

あの日　母はまだほんの子どもだったわたしと

秘密をわけあうように肩を寄せ　小匣の蓋（ふた）
を開けた

あかぎれの切れた母のてのひらの　あかいさざ波

のうえに

乗っていたのは　薬指ほどの舟型（ふながた）のブ

ローチ

金細工（きんざいく）の舟は　怪物のしゃくれた唇

みたいに湾曲（わんきよく）し

小びとの船頭さんが櫂（かい）を操（あやつ）って
いる

べねちあの　ごんどら

毀（こわ）れた鈴の声で母は言った

舳先（へさき）には米粒より小さい　緑の宝石がぶ
ら下がり

ブローチの裏がわには鈍い金いろの　むきだしの　おかあさん　すてたのですね
針が仕組まれていた　　べねちあの　ごんどら

三月　サンマルコ広場を　嘴（くちばし）の仮面を
かむり

黒いガウンを羽織ったパレードの行列がねり歩く
ジュデツカ運河に架（か）かる木の橋から　運河の
澱（おり）へ

仮面の息の穴からもれ　水中ふかく溺（おぼ）れて
ゆく　ため息

あの日　母は身を乗り出して　棄（す）てたのだ

④

笑顔 もみにやーじ

母子に間違えられたことはなかったと思う。

わたしには、年の離れた友人がいた。

2月20日、虹の橋を渡ってしまった。誕生日間近。

年を取るのを嫌って。

肺炎と聞いている。

ウインドウショッピングが好きな二人。

店員さんに話しかけると、

「そう、友達なのよ」

と嬉しそうに笑った。

あの笑顔が好きだ。

無邪気な満面の笑みに、こちらと同じ笑顔を返したくなる。

結婚式。円卓から手を振ってくれた。

わたしがその時の自分の顔を知っているのは、カメラマンさんが映してくれた一枚があるからだ。

あの時の視線の先に、手を振ってくれている、あの人がいる。

母のようだと思ったことも、たぶんない。うん、ない。一度もない。

「娘がいるように見えないでしょ」

それがあの人の自慢だった。

彼女はずっと、わたしの大事な友達なのだ。

また会いたい。橋の向こうでも、お気に入り
の黄色い眼鏡をかけているだろうか…

⑤

地母神 (ちぼしん) 波野 仁

胎盤の灼熱が癒 (い) えし時

蒼い月の手が

揺り籠をゆらす

揺蕩 (たゆた) う波間に

水母 (くらげ) が謳歌し

聳 (そび) える頂 (いただ) きに

雲母 (うんも) が乱舞する

輪廻が鼓舞する賛歌に

無常の鎖が絡みつく

滔々 (とうとう) と流れる脳漿 (のうしょう) や粘

液は

膨張する時間 (とき) に吞まれ

最果（さいは）てで輪舞（ロンド）を嗜（たしな）む

衆生（しゅじょう）は安寧（あんねい）に抱（いだ）かれ

満ち満ちた羊水に

永劫（えいごう）と刹那（せつな）の谷間で

命の粒子（つぶ）が瞑想（めいそう）し煌（きら）めき

地母神は睡（ねむ）る

たなびく叢（くさむら）に

明日が瞬（またた）く



⑥

母へ 清水崇彦

たらちねの母の乳房にたはむれし

ちひさきわが手おぼへ 今なほ

あれは 北海道でのこと

縁側で 母に抱かれながら

母の乳を顔にかけ

私ははしやいでいた

顔が汚れるのも厭わず

そんな私を

母は嬉しそうに見ていた

私は一才くらいだから

戦争はまだ続いていただろう

陽射しがおだやかな

きつと春のころだ

母の乳房が 手にとても

やわらかかった私の

いちばん 幼い記憶だ

炎天の畑（はた）のどとの間（あわひ）にぞ

甘蕉（バナナ）わけ食み（はみ）母とをりける

畑しごこの手を休めると

母は懐からお金を取り出し

バナナを買っておいでと言った

私は走った

通りの店で お金を見せたら

一本しか買えないという

それでも おばさんは

笑顔で 一本だけくれた

半分に折って 母と食べた

はじめて食べるバナナは

まくわ瓜のような味だった

母は笑みを浮かべていた

きつと 私にバナナの味を

教えたかったのだ

星たかき天と地にあり母とわれ

いのち二つの確かなれば

母は婦人運動をする人だった

農村女性の 重い労働の軽減

そして 母性の保護 会合で

夜出かける時はいつも

私がいつしよだった

帰り道 夜空を見上げると

満天の星々がきらめいていた

足もとの水田は 白々と光り

蛙の ひしゃげた鳴き声が

せせらぎのように

絶え間なく聞こえていた

天と地の間でここにいるのは

本当に母と私の二人だけだった

なぜかむしように愛おしかった

遠き日の母に詫びする彼岸かな

愛にむくゆる時ぞはるけき

母があゝの世に去って

もう四十六年ずい分

遠いところに行ってしまった

モノトーンの写真はいつも

変わらず微笑んでいるけれど

どこか遠いところを見ている

母は私にいのちをくれた

かけがえのないいのちを私は

母に何を返したのだろうただ

ひたすら愛を受けてばかり

思ったように生きよと

母は言っただが

それでよかったのか時だけが

戻りようもなく刻まれて行く

⑦

母 加納由将

母が縮んでいく

しかりつけていた母が色あせていく

一瞬心地よく

遠くで雷鳴響く

気が付くとどうにも丸くなった母が歩いていく

杖代わりの車椅子の車輪が回っていく

にこやかににこやかに時間が過ぎていく

気が付くと後ろのほうから歩く

後ろにはあしあとが続く

あしあとが遠い山を越えてつながっていく

母が縮んでいく

止められない時間がめぐりゆく

⑧

一番好きな花

スノードロップ

好きな花はなに？

「・・・全部好き」

そうじゃなくて

一番好きな花は？

「・・・決められへん」

自然に何となく思い浮かぶやろ？

と云つても結局は答えなかった母

軽く適当に答えるということが

できないわけではないのに

やけにこだわるんやなあ

本当に決められへんの？

「どれか一つに決めたら他の花が
気を悪くするやろ」

なるほどね・・・

つていうか

花全部と友達・・・なのですね

父は ききよう

母は スノードロップ

なぜかその花の名が浮かんでくる

私はなんの花が好きなのかなあ

そつちに行つたとき聞かれてもいいように
答えを考えておくね

⑨

仔象のパンジャブと

春名江吏子^{えり}

太陽が大きな幹の間から
朝の光が差し込み始めたら
母さんとお別れです
私の愛しいパンジャブよ
あなたはまだ砂糖きびも
満足に口にはこべない
二才の仔象です
ラタコーンおじさんの家は
代々象使いの家系です

きっとやさしくあなたを
迎えてくれるでしょう
私の愛しいパンジャブよ
厳しい訓練を乗り越えて
村一番働く象になりなさい
母さんも学んでいきましょう
心も体も象の群れの長へと
大きく成長していきます
あなたの驚く顔が見たいから
私の愛しいパンジャブよ
そしてスリンの象祭りの日
堂々と共にならんで
行進してまいりましょう

約束です

約束ですよ

⑩

さ・が・ら（玉縫い）

母へ

すみくらまりこ

ふとんに落ちた針を

おろおろ探していると、

「針は優しいえ」と

きまってあなたは言った、母よ。

「針は寝よ寝よとするのえ」

とあなたは続けた。母よ。

針一本でわたしを育てたあなた。

一人で過ごす長い夜、

あなたを偲んで玉縫いをする。

心模様を色に置き、

一つ一つ糸留めをするたび。

凝密（ぎようみつ）してくるわたしの想い・・・

黒絹の上には月青く、

萩が惜しげもなく

咲き零れている。

⑪

母（俳句） 吉村侑久代

「戻ってきてえな」雪道に母の声

母捨ててわれ出奔す 冬花火

桜狩 母似の人とすれ違う

「帰ってきてえな」母の声聴く春日陰

魚煮つけ菜花を添えて 母の絶品

京都にはもう帰らぬと若葉風

春風に誘われて呼ぶ「おかあはん」

母が立つ玄関先に沈丁花

春嵐 和む抹茶や弟と老母
おと はは

春風や 母似の「おたやん」内玄関

「おかあはん」帰ってきたえ春一夜

春夢かな 母と姑との話声

春鏡 老母に似てきた我がいる

パラソルも老母の指輪も桜色

藍染めの家着手作りや父好み

父母は美男美女なり 春の道

母逝きて母の春着を身に纏う

鴨川も長良の川も千鳥鳴く

⑫

海からきた女

有馬 敲

かの女は海からきた 頭にこんぶを生やし 口に
はさんごをくわえて かの女の腹のなかに 生ま
れたときの海の水がそのまま揺れていた 恥部の
テングサ 両耳の貝がら

深海の底から抜けてきたかの女の記憶の奥に と
こやみで低音を怖るべき圧力の世界があつた 何
千年のあいだ かの女はそれにたえて 陸にあが
つたのだ 灼けつく陽の下で 肌はうろこ色にか

がやき 潮のにおいがのこった くびれた腰のう
しろに 退化したひれの跡があつた

核爆発と境界線を拒否した海 かの女の羊水のな
かに みずみずしい胎児は浮かんていた かつて
かの女が持つてあがつた潮水のなかに

13

花の殻

司 由衣

なぜ踏み外してしまったのか
胸を踏台にぶつけた
救急車で病院へ行ったら
肺を突き刺す 一歩手前で
肋骨が二本折れていた

思ひに

今日は三月十二日

わたしの十九歳が肺膿瘍で

左肺葉の下半分を切断
打ちのめされた日

全身麻酔から覚めると

病室に坂本九の歌が流れ

おかあさんたら

涙を悟られないように

風邪を引いた振りをした

その おかあさんも

死んでしまつて

かれこれ三十年が経っていた

その間 あれやこれやで

おかあさんのこと

なおざりにしてしまった

遠い空の涯

今も生きていると信じよう

思い出すのは わたしが

子供だった頃のこと

おかあさんが傍にいただけ

リビングやテラスのシャンデリアが

まるでお星さまみたい

キラキラ キラキラ

楕円形の大きなテーブルには

紅茶とケーキが運ばれ

今となれば それさえも

幻なのか 儚き夢か

母のおもかげ抱きしめても

すでに散ってしまった 花の殻

母よ

あなたへの償いをしよう

永遠よ

廻れ 廻れ

いつの時代も

そして いつか

お逢いしましょう

ねえ おかあさん

非売品

二〇二五年七月五日

(C) 日本国際詩人協会